あるどこに、あばとちゃといだっけど。そこの家によ、おなごわらし、三人いだけど。その家のちゃ、ひやみなんだどよ。ひやみだたって、食わねでえられねべ。それがために、山さカンノ（畑）おごしたんだど。クワかついで、カマをないで、毎日山堀りに行ったごでエ。山掘って、そごさアワまいだんだど。したばアワど草と、ふとじくらいにおがるんだど。

さあ、ひやみだために、なかなかむしりきれねわけだ。わ（自分）一人で草こむしたたて、なかなかはかどらねわけだ。それだために、したば、ものはためしだから、ひとつ叫んでみるどて、くろさ腰かけで、たばこふきながら、叫んでみたんだど。

「このアワ畑の草むしってけだ人さ、三人えだうちの娘、一人ける」

って、叫んだんだど。ひと声ではできねがら、三声叫ぶどて、

「このアワ畑の草むしった人さ、三人えだ娘、一人ける」

って、叫んだんだど。それからまだ、

「このアワ畑の草むしってけだ人さ、三人持ったうちの、娘一人ける」

と、三度叫んだんだど。そしたば、やぶからがだがだと出はってきたんだど。

「親方、親方、いま言ったこと、間違いねべな」

こう言って聞くど。

「はいはい、確かに三人います」

と言ったど。

「したば、三日間のうちにこれむしるど。アワはアワ、草は草にちゃんとむしるど。それ調べて、気にいったば、娘もらうに行ぐ」

ど、こう約束したんだど。

やっぱし二日半で、アワはアワ、草は草に、むしってしまったんだど。こんだ、ちゃも困ってしまったど。娘たち、いうごと聞くか聞かねが、わがらねべエ。こんだ、四日目の朝までになったども、そのちゃ、起ぎねんだどよ。したば、あば、いちばん大きいお先こで娘さ、

「お先、お先、ちゃどこ起ごしてこい。まんまけえって」

お先、起ごしに行ったごでエ。

「ちゃ、まんまけど」

したば、ちゃ言うごどに、

「俺、苦だことあって、起きてまんま食われねエ。お前言うこと聞くごったば、起きてまんま食う」

ったど。

「なによ」

ってこう言うんだど

「俺しゃ、こういうわけで、畑の草むしったら、娘一人けるって言ったば、確かにむしってもらったど。そしてしゃ、山にけることにしたども、お前行ってけるごったば食うし、行がねごったば、俺、まんまどこの騒ぎでね」

ど、そう言ったんだど。

「山さだのだれ。隣のおんじこさだば行くども。俺、山の人さだば、行がね」

こう言うんだど。

「ああ、困った」
ったど。
二番目は、お静こだど。あばまだ、
「お静、お静、ちゃどこ起ごしてこい。まんま食えって、起ごしてこい」
ったど。お静来て、
「ちゃ、まんまけど」
「俺、苦だことあって、起きてまんまかえね。んが言うこと聞くごったば、起きてまんまくう」
っと、こう言うんだど。
「なによ」
と、こう噛くんだど。
「こういうわけで、山さけることにしたども、お前言うこと聞くごったば、起きてくう」
ったど。
「山さだのだれ。東京さでも売られで行くのだば、行くども。俺、山さだの行かね」
こう言うんだど。まだ、困ったど。三番目また、お留こだど。
「お留、お留、ちゃどこ起こしてまんまかせれ、昼までになるべ」
あば、こう言うんだと。したば、お留行って、
「起きてまんまけエ。ちゃ」
ったど。したば、こういうわけで、まだ寝でるったば、
「親の言うことだおの、なんだって仕方ねエべ。喝くべったア」
そう言うんだど。それでこんだ。起きてまんま食ったどでエ。
昼までになるし、いま来るべと思って、心始末して待ってだどでエ。
そのわらしまだ、あばに髪など結ってもらってよ、行くことに決めてえだっけど。そしたば、昔の酒一升たないで、来たっけど。それは、サルであったど。約束どおりに、祝い事して、けでやることにしたど。そしたば、バカ娘ども、
「「サルかがだ」
どて、やしめるんだど。
「俺、ちゃどあばから生まれたのだから、ちゃどあばの言うこと聞けば、間違えねんだ。俺、行くど」
と、そのわらし、山さ行ったど。竹ヤブ越え、山越え、野を越え、ずうっと奥さ行ったば、昔の掘立て小屋こだっけど。
「んだたて、仕方ねエ。親のいうことだから」
ってえだど。したば、サルまだめんごがって、姫こと名づけて、
「姫こ、姫こ」
ってはあ、えだど。山だから、沢から水汲んでくるんだが、米といでくるんだが、野菜取ってけるんだが、逃げることも出来ねんだど。その姫こ行く時は、
「んがどこなの置いで、俺、逃げてくる。親の顔たてねば出来ねから、いうこと聞くのだから、いつか逃げてくる」
どて行ったのだども、逃げてこらえねんだど。
そしたば、ある時、モチつきあるけど。
「このモチ、俺あ家のちゃだのあばだのさ、持っていって食わせだら、なんぼか喜ぶんだがア」
って、こう言ったど。そしたば、
「このモチ、鍋させで持っていくがア」
だの
「粉でおろして、はやしていくがア」

だのって言うんだど。サルがな。
「俺ら家のちゃだのあばだの、けぎらいする人で、土くさいの、鍋くさいのって、食わね人だ」
って、こう言うんだど。
「んだら、白まじか背負っていくが」
こう言うんだど。
「うん、そうすれば喜ぶんだな」
って、こう言ったど。
「んだら、背負ってえぐ」
でもんで、山から木の葉取って、木の葉かぶせで、それさこんだ蓋して、その上をふろしきに包んで、ナワで白まじか背負ってきたど。山越え、野を越えて、背負ってきたど。そしたば、だんだん来るうちに、大っきな川あって、その川さ、なだれた桜の木あるけど。したばその桜、満開なんだど。
「あら、この桜きれいだこと。折っていったら、俺ら家のちゃだのあばだの、なんぼ喜ぶんだか」
と、こう言ったんだど。
「よしよし、俺取ってくる。ここさ、白おろしていぐがな」
と言うんだど。
「ちゃだのあばだの、このあだりさおろせば、土くせどて、かねんだおな」
って、こう言ったんだど。
「んだば、これ背負ってえぐ」どて、桜の木さっぱったんだど。
「これえが、姫こ」
「もう少し、そっちのよ」
「これえが、姫こ」
こう言うんだど。おが、姫こいだましくてな。
「お前のあがってだ枝このがええな」
と言ったんだど。そしたば、わのあがってるの、なんだのことねぐ、パチャッと折ったべ。からだ重いために、白まじか、川にどたんと落ちたんだど。
「ああ、えがった」
どて、姫こ拝んだこでエ。そしたば、ずっと流れてえぐんだと。したばサルあ、うたかけでよごしたど。
「サルのいのちいらねども、あどで姫こ、泣くべな、泣くべな」
と叫んでいくど。それでこんだ、姫こ、ずっと流れていくどこまで見て、わの家さ来たと。したば、あばとちゃと、泣いで泣いでよ。
「よぐもどって来た」
ど、泣いてさべれねけど。あとのがぎとまだ、
「サルかが、なして来たべエ。おがしごと」
って、やしめてよ、たいしたもんだけど。んだどもよ、親孝行した人は、ええどころさもらわれだども、それごそ隣のおじこどこさだばえぐの、東京さだば売られでえぐのと言った娘どは、やっぱりそのとおりに、稼がねば食われね人になって、暮らしたけど。
あとはとっぴんぱらりのぷう。